

(19) 日本国特許庁 (J P)

(12) 公開特許公報 (A)

(11) 特許出願公開番号

特開平6-194572

(43) 公開日 平成6年(1994)7月15日

(51) Int. Cl. <sup>5</sup>  
G02B 15/20  
13/18

識別記号

庁内整理番号  
9120-2K  
9120-2K

F I

技術表示箇所

審査請求 未請求 請求項の数2 (全17頁)

(21) 出願番号 特願平4-344640

(22) 出願日 平成4年(1992)12月24日

See Appln  
pgs 1 & 2

(71) 出願人 000006079

ミノルタカメラ株式会社  
大阪府大阪市中央区安土町二丁目3番13号 大阪国際ビル

(72) 発明者 坂 真奈美

大阪府大阪市中央区安土町二丁目3番13号 大阪国際ビル ミノルタカメラ株式会社内

(72) 発明者 中川 朋子

大阪府大阪市中央区安土町二丁目3番13号 大阪国際ビル ミノルタカメラ株式会社内

(72) 発明者 荻野 修司

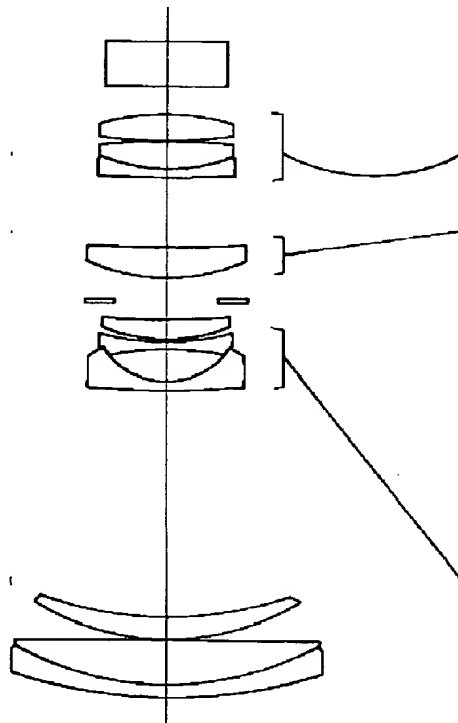
大阪府大阪市中央区安土町二丁目3番13号 大阪国際ビル ミノルタカメラ株式会社内

(54) 【発明の名称】 変倍レンズ

(57) 【要約】

【目的】 変倍比が1.2倍程度でFナンバーが1.8程度という高変倍でかつ明るい変倍レンズを、コンパクトかつ少ない構成枚数で実現し、しかも性能面でも充分満足できるものを提供する。

【構成】 物体側より順に、正の屈折力の第1レンズ成分、負の屈折力の第2レンズ成分、正の屈折力の第3レンズ成分、正の屈折力の第4レンズ成分を有する変倍レンズにおいて、第1レンズ成分及び第2レンズ成分の屈折力を適切に規定している。さらに、変倍時における第2、第3、第4レンズ成分それぞれの動きを適切に規定している。



## 【特許請求の範囲】

【請求項1】 物体側より順に、正の屈折力の第1レンズ成分、負の屈折力の第2レンズ成分、正の屈折力の第3レンズ成分、正の屈折力の第4レンズ成分とを有し、以下の条件式を満足することを特徴とする変倍レンズ

$$0.10 \leq fs \cdot \phi 1 \leq 0.25$$

$$0.45 < fs \cdot |\phi 2| < 1.25$$

但し、 $fs$ は広角端における全系の焦点距離、

$\phi 1$ は第1レンズ成分の屈折力、

$\phi 2$ は第2レンズ成分の屈折力である。

【請求項2】 前記第2レンズ成分は変倍のために光軸上を前後に可動であり、前記第3レンズ成分は同じく変倍のために第2レンズ成分とは反対方向に光軸上を前後に可動であり、前期第4レンズ成分は変倍時の像面の位置を一定にするために光軸上をUターン状の軌跡を描いて前後に可動であることを特徴とする請求項1に記載の変倍レンズ。

## 【発明の詳細な説明】

## 【0001】

【産業上の利用分野】 本発明は、ビデオカメラ等の小型カメラに適用される変倍比の大きい変倍レンズに関する。

## 【0002】

【従来の技術】 近年、ビデオカメラ等のカメラ本体は電子部品のパッケージ化や集積率の向上により、重量・体積とも格段にコンパクト化が進んでいる。一方、カメラ本体の価格面・コスト面においても低廉価が著しい。

【0003】 このような中において、レンズの重量・体積・コストも、絶対値では少しずつ改善されている。しかし、カメラ本体に対する相対値は年々上昇している状況である。従って、レンズのコンパクト化・コストダウンの要請はより強いものとなっている。

【0004】 また、撮像素子の小型化による照度不足を補うための大口径比化や、さらには高画素化・高解像度化に対応するための高性能化というように、レンズに求められる性能はより高くなってきている。

【0005】 基本的に本発明では、変倍比として、現在特にビデオカメラ分野で主流である1.2倍程度、FナンバーはF1.8程度の口径比の変倍レンズを想定する。

【0006】 このようなスペックを満足するものは4成分または5成分よりなるズームレンズで、特開平1-17917号公報等これまで数多く提案されているが、その大半は13~15枚程度のレンズよりなる構成であり、コスト的にも大きき的にも現在の要求を満足できるものとはいえない。

【0007】 また一眼レフカメラ用のレンズでは、特開平2-66509号公報等で提案されているように、多成分を移動させることにより各レンズ成分の移動量を減らしコンパクト化を図ったものが多くみられる。この様なタイプでは、ズーム時に第1レンズ成分も移動させてい

るが、ビデオカメラでは駆動部分のコンパクト化も重要な目的のため、ズーム時には重量の大きい第1レンズ成分を固定する方がはるかに有利である。

【0008】 そこで最近のビデオカメラでは、非球面を用いることによって構成枚数を削減するといったような動きが見られるようになってきた。例えば特開昭57-27219号公報に示されたズームレンズは、正負正の3成分よりなる系で、第1レンズ成分を像点位置補正成分（コンペンセーター）、第2レンズ成分を変倍成分（バリエーター）として光軸上を移動させ、各レンズ成分に非球面を1面ずつ使用することによってF1.6の3倍ズームレンズを12枚のレンズで実現している。しかし、これはズーム構成やレンズ形状・配置等が有効とはいえ、構成枚数はそのスペックから考えて少なくない。

【0009】 また、このタイプのレンズをを6倍以上の高変倍ズームにまで拡張することは不可能である。その理由の一つは、上述したレンズ形状・配置等の不適性の他に次のような欠点を持つからである。すなわち、変倍時に第3レンズ成分を移動させていないため、必然的に第1レンズ成分がコンペンセーターレンズ成分として移動し、そのとき6倍以上の高変倍を達成するには、広角端もしくはミドル域（中間焦点距離）での使用を考慮すると、4成分及び5成分よりなるズームレンズに対し、第1レンズ成分（前玉）の径がかなり大きくなり、また重量が相当重くなるからである。

【0010】 これに対し、4成分ズームレンズでレンズ形状・配置と非球面の配置をかなり有効に行い、構成枚数を大幅に削減したものとして、特開昭61-110112号公報や特開昭60-107013号公報で提案されたものがある。

【0011】 特開昭61-110112号公報で提案されたレンズは正負負正の4成分系で、各レンズ成分を簡潔に構成し、4面の非球面をうまく使用することにより、全系でわずか8枚のレンズで6倍ズームレンズを達成している。しかし、収差性能はかなり悪く、現在の要求性能を満足することは困難である。

【0012】 また、特開昭60-107013号公報は正負正正の4成分系で8枚構成の模式図が図示されているが、数値データ不在のため、その性能や大きさが判断できず、またスペック的にもF2の4倍ズームであるので高変倍ズームには応用できないと予想される。

【0013】 その他、低変倍比ではあるが、特開昭63-304218号公報や特開昭64-44907号公報、特開平1-223408号公報等、第2レンズ成分を1枚、第1レンズ成分を1~2枚とした正負正の3成分系によって、非球面の力も借りながら思い切って枚数削減を図ったものも提案されている。しかし、これらのレンズタイプは、変倍の主役でかつ変倍に際し光軸上を大きく移動する第2レンズ成分を負単レンズ1枚で構成していて、第2レンズ成分内での色収差補正がなされていないために、変倍による色収差の変動が大きくなり、高変倍に応用した時には性能保障

が出来ない。こと実これらの例は、変倍比が2～3倍と低く、FナンバーもF2～4程度と暗いものしか実現出来ていない。この色収差変動は非球面を多用しても改善できるものではなく、このようなレンズタイプは現在の要求性能（色収差含む）から考慮して、せいぜい3倍どまりの変倍比までしか達成できる見込みがなく、12倍クラスに応用することは不可能である。

【0014】さらに、特開昭64-91110号公報や特開平1-185608号公報にも斬新なズームレンズが提案されている。特開昭64-91110号公報は3成分ズームレンズとほぼ同じようなレンズ形状でありながら、この第2レンズ成分に相当する部分を2枚の負レンズよりなる負成分と1枚の正レンズよりなる成分とに分離することにより、実質的な構成を4成分系として、構成枚数を3成分並の8～11枚におさえ3倍ズームを実現している。変倍は上述した負成分と正成分を各々独立に移動させることにより行なっている。しかし、この4成分ズームレンズの本質的な弱点は、独立に移動する第2レンズ成分と第3レンズ成分の各々のレンズ成分内での色補正が完結していないために、高変倍ズームに応用した場合には、変倍による色収差変動を十分に抑えきれないことである。この例では3倍という低変倍比にとどめてズーム解を工夫することによりなんとか色収差変動を抑えているが、これを6倍ズームに応用するのはかなり困難である。

【0015】特開平1-185608号公報は、非球面を多用することによって、特開昭64-91110号公報で提案されたレンズの構成枚数を減らしつつ6倍ズームにまで発展させたものである。これは特開昭64-91110号公報で提案されたレンズの第2レンズ成分を負単レンズ1枚、第3レンズ成分を正単レンズ1枚にしてあり、第4レンズ成分も簡略化してある。しかし、これにおいても上述した色収差変動が大きいため、ズーム解の工夫をかなり施してあるもののまだ残存色収差が大きく、現状の要求性能を満たすことは難しい。さらに色収差補正にかなりのウェイトを置いたズーム解になっているため、移動レンズ成分である第2レンズ成分と第3レンズ成分の移動量がかなり大きく、全長が長くなっているということと、特に重量に大きな影響を与える前玉の外径が、既存の同スペックの一般的なものに比べかなり大きくなっているため、コンパクト性という観点にたてば、ここで提案されているものは悪化しているといわざるを得ない。このように特開平1-185608号公報で提案されたズームレンズは枚数削減という目的は達成しているものの、コンパクト性・色収差性能は現状のニーズを満足できるものではないという結論になる。

【0016】さらに、特開平1-185608号公報と同じく正負正正の4成分の構成で色収差変動も抑えることが出来るものとして、特開平2-39011号公報に開示されたものがある。これは、非球面を3面使用し、F1.4の6倍ズームを8枚のレンズで達成しているものであり、上述の

各例よりコスト面・性能面・大きさ面より、実現可能性が高いものと思われる。しかし残存する問題点としては、前玉の径が小さいとはいえず重量的には既存のものに対しさしたる優位性がないということと、収差図には現われにくいサジタル方向のコマ収差（リンネンフェラー）が非常に大きく軸外の性能劣化が大きいということが挙げられる。4成分系ズームレンズは、この延長線上で徐々にこれら問題点を改良してゆくことが期待される。

【0017】また、正負正の3成分系で各レンズ成分を移動させることにより枚数を削減し高変倍化を図ったもので、一眼レフ用やコンパクトカメラ用として提案されたものとしては、特開昭54-30855号公報、特開昭54-80143号公報に開示されたものや特開平2-39116号公報に開示されたものがある。各々順に変倍比と構成レンズ枚数は、2.4倍/10枚、3倍/11枚、3倍/12枚であり、変倍比が不十分でかつ特に第2レンズ成分や第3レンズ成分の簡略化が充分達成されておらず、コスト的にも充分ではない。

【0018】

【発明が解決しようとする課題】本発明は、変倍比が12倍程度でFナンバーが1.8程度という高変倍でかつ明るい変倍レンズを、コンパクトかつ少ない構成枚数で実現し、しかも性能面でも充分満足できるものを提供することを目的とする。

【0019】

【課題を解決するための手段】上記目的を達成するために本発明では、物体側より順に、正の屈折力の第1レンズ成分、負の屈折力の第2レンズ成分、正の屈折力の第3レンズ成分、正の屈折力の第4レンズ成分を有する変倍レンズにおいて、第1レンズ成分及び第2レンズ成分の屈折力を適切に規定した。

【0020】さらに、変倍時における第2、第3、第4レンズ成分それぞれの動きを適切に規定した。

【0021】

【作用】上記構成を有することにより、本発明はコンパクトでしかも構成枚数が少ないにもかかわらず、変倍比が12倍程度でFナンバーも1.8程度という高変倍でかつ明るい変倍レンズが実現できる。

【0022】

【実施例】以下、本発明の実施例について詳述する。本発明の変倍レンズは、物体側より順に、正の屈折力の第1レンズ成分、負の屈折力の第2レンズ成分、正の屈折力の第3レンズ成分、正の屈折力の第4レンズ成分とを有し、以下の条件式（1）、（2）を満足することを特徴とする。

【0023】

$$0.10 \leq f_s \cdot \phi_1 \leq 0.25 \quad (1)$$

$$0.45 < f_s \cdot |\phi_2| < 1.25 \quad (2)$$

但し、 $f_s$ は広角端における全系の焦点距離、 $\phi_1$ は第1

レンズ成分の屈折力、 $\phi 2$ は第2レンズ成分の屈折力である。

【0024】条件式(1)は、第1レンズ成分の屈折力の適正な範囲を規定するものである。4成分のレンズ系においては、各レンズ成分で発生する収差を適正に抑えなければ、全焦点距離範囲にわたって良好な収差性能を有する高変倍のズームレンズを実現することが不可能となる。条件式(1)の上限を越えて第1レンズ成分の屈折力が強くなると、第1レンズ成分内で発生する収差の量が大きくなるためズーミングによる全系の収差変動も大きくなり、例えばミドル付近で要求性能を満たさなくなってしまう。ミドル付近は望遠端あるいは広角端と比べると使用頻度が少ないが、極端に悪い性能であれば、ますます高性能・高スペック化が求められる最近のレンズではまったく許容できない。

【0025】条件式(1)の下限を越えて第1レンズ成分の屈折力が弱くなると、ズーミングのために取らなくてはならない第1レンズ成分と第2レンズ成分との間隔が極端に長くなり、従ってレンズ全長も著しく長くなってしまふ。ビデオカメラ自体が小型化してきているため、最近のレンズ系はスペックや性能と共により一層のコンパクト化が要求されるようになってきている。このためいくら性能やスペックが高くても、著しく全長の長いレンズ系ではカメラとの間で全くバランスが取れない。

【0026】条件式(2)は第2レンズ成分の屈折力の適正な範囲を規定するものである。第1レンズ成分の場合と同じように、第2レンズ成分で発生する収差も全焦点距離範囲の収差変動に大きく関与している。条件式

(2)の上限を越えて第2レンズ成分の屈折力が強くなると、第2レンズ成分で発生する収差が大きくなり、ズーミングによる全系の収差変動が著しく大きくなってしまふ。また、第2レンズ成分は変倍を主に行っているため特に屈折力が強く、第3レンズ成分や第4レンズ成分の収差補正にも大きな影響を及ぼし、明るいレンズ系の実現が困難となる。

【0027】条件式(2)の下限を越えて第2レンズ成分の屈折力が弱くなると、ズーミングのために第2レンズ成分が移動する量が大きくなりレンズ全長が著しく長くなってしまふ。第2レンズ成分は主として変倍のために移動しているので、全長に及ぼす寄与は著しい。

【0028】また、本発明の変倍レンズでは、第2レンズ成分は変倍のために光軸上を前後に可動であり、第3レンズ成分は同じく変倍のために第2レンズ成分とは反対方向に光軸上を前後に可動であり、前期第4レンズ成分は変倍時の像面の位置を一定にするために光軸上をUターン状の軌跡を描いて前後に可動であることを特徴とする。

【0029】上記のように、変倍時に各レンズ成分が移動することにより、第3成分にも変倍効果を分担させる

ことができ、しかも第3レンズ成分の移動による全長の大型化が防止される。

【0030】さらに、第2レンズ成分及び第3レンズ成分はともに線型に移動するのが望ましい。一般にズームレンズでは、移動するレンズ成分の数が少ない方が機構も簡単でコンパクトになる。しかしながら複数のレンズ成分を一つの機構を使って移動させることが可能であれば、移動レンズ成分が比較的多くても簡単な機構とすることが可能である。上述のように第2レンズ成分及び第3レンズ成分を線型に移動させることによって、ギア・リード等を介して二つの移動レンズ成分を一つの機構で比較的簡単に移動させることができる。

【0031】さらに、本発明の変倍レンズは、以下の条件式(3)を満足することが望ましい。

【0032】

$$0.10 < \phi 1 / |\phi 2| < 0.35 \quad (3)$$

条件式(3)は、第1レンズ成分と第2レンズ成分の屈折力配分の適正なバランスを規定するものである。全系のレンズ枚数は、第1レンズ成分と第2レンズ成分との屈折力のバランスに大きく左右される。

【0033】条件式(3)の上限を越えて第1レンズ成分の屈折力が強くなると、像面位置を補正する第4レンズ成分の軌跡が望遠端よりも広角端で物体側に寄り、最も物体側となる位置がより第3レンズ成分に近くなる。第3レンズ成分と第4レンズ成分との間隔が小さくなると第4レンズ成分に入射する光束幅が大きくなり、第4レンズ成分で補正しなければならない収差量が大きくなって第3レンズ成分や第4レンズ成分のレンズ枚数が増加してしまう。

【0034】条件式(3)の下限を越えて第2レンズ成分の屈折力が強くなると、第4レンズ成分の軌跡が望遠端よりも広角端で像面側に寄り、レンズバックが短くなったりレンズ全長が長くなったりする。ビデオレンズでは一眼レフと比較して長いレンズバックを必要としている。これはレンズの像面側にローパスフィルターやフェイスプレート等の厚い平板を挿入するためである。最近では画面サイズ(CCDサイズ)が小さくなる傾向にあるが、CCDをカバーするフェイスプレートの厚みはほとんど変わっていないため、レンズの全長に対するレンズバックの比はますます大きくなっている。つまり、レンズバックが極端に短くなるとレンズ系自体が実現できなくなってしまう可能性がある。もちろんレンズの構成枚数を変えることでレンズバックを長くすることはある程度可能ではあるが、そのためにはレンズ枚数を著しく多くしなくてはならない。

【0035】さらに、第1レンズ成分は高分散材料の負レンズを少なくとも1枚含む2枚以上のレンズで構成され、第2レンズ成分は高分散材料の正レンズを少なくとも1枚含む2枚以上のレンズで構成され、第4レンズ成分は高分散材料の負レンズを少なくとも1枚含む2枚以

上のレンズで構成されていることが望ましい。

【0036】さらに、本発明の変倍レンズは、以下の条件式(4)～(6)を満足することが望ましい。

【0037】

$$\nu 1N < 30 \quad (4)$$

$$\nu 2P < 30 \quad (5)$$

$$\nu 3N < 30 \quad (6)$$

但し、 $\nu 1N$ は第1レンズ成分中の負の高分散レンズのアップベ数、 $\nu 2P$ は第2レンズ成分中の正の高分散レンズのアップベ数、 $\nu 3N$ は第3レンズ成分中の負の高分散レンズのアップベ数である。

【0038】条件式(4)～(6)は各レンズ成分の色収差補正に関するものである。ズームレンズにおいてはどのようなレンズタイプであるかに関わらず、各レンズ成分内で色収差が補正されていることが必要である。これは、各レンズ成分の相対位置が変倍にともなって大きく変化しているため、もし各レンズ成分内で色収差補正がされていなかったり不十分であると、変倍によって色収差が大きく変動してしまい要求性能を満たすことが出来ない。この傾向は、変倍比が大きくなるほど顕著で8倍ズーム以上になると色収差補正は必ず適正にされていなければならない。条件式(4)～(6)の上限を越えてアップベ数が大きくなると、各レンズ成分内の色収差補正の能力が不十分となり、変倍による色収差変動が許容量を越えてしまう。

【0039】また、前記第1レンズ成分は、物体側より順に負メニスカスレンズおよび正レンズの合計2枚のレンズで構成されるのが望ましい。第1レンズ成分を最も少ないレンズ枚数で構成するときには、前述のように各レンズ成分内で色収差を補正する必要から、少なくとも2枚のレンズが必要である。しかしながら、レンズの形状や並びが適切でなければ、少ない枚数で色収差以外の収差を補正することが困難となる。従って最も適切なレンズ構成としては上述のようになる。より詳細には、負メニスカスレンズは像面側に強い曲率の面を向け、正レンズは物体側に強い曲率の面を向けるのが望ましい。

【0040】前記第2レンズ成分は、物体側より順に負レンズおよび正レンズの合計2枚のレンズで構成されるのが望ましい。第2レンズ成分を最も少ないレンズ枚数で構成するには、やはり色収差補正を考慮に置いて、少なくとも2枚のレンズ構成にしなければならない。この時、第2レンズ成分で発生する収差をできるだけ補正するには上述のような構成にする必要がある。より詳細には、負レンズは像面側に強い屈折力の面を向け、正レンズは物体側に強い屈折力の面を向けるのが望ましい。

【0041】あるいは、前記第1レンズ成分は、物体側より順に負メニスカスレンズ、正レンズおよび正メニスカスレンズの合計3枚のレンズで構成されるのが望ましい。高性能で高変倍のズームレンズになると、各レンズ成分での収差補正をより厳格に行う必要がある。これは

各レンズ成分で発生する収差を補正しなければズームングにおける収差の変動が大きくなってしまい、全ての焦点距離範囲で必要な性能を得ることができないためである。各レンズ成分の収差をできるだけ小さく抑えるには、一つの方法として各レンズ成分の屈折力を弱くすることが考えられる。しかしながら、この方法では当然ズーム時の各レンズ成分の移動量が大きくなってレンズ系も大きくなってしまう。もう一つの方法は各レンズ成分のレンズ枚数を増やすものである。この方法を採用すると、レンズ系をコンパクトにできレンズ外径も小さくできるため、レンズ枚数が少ないものよりもかえってコストが安くなるというメリットもある。具体的には、上述のような3枚構成にするのが最も良い。この様な3枚構成はかなり収差を補正する効果があり、1.2倍程度のズームレンズにも十分応用可能である。

【0042】また、前記第2レンズ成分は、物体側より順に負レンズ、両凹レンズおよび正レンズの合計3枚のレンズで構成されるのが望ましい。高変倍比のズームレンズでは第2レンズ成分も上述のような3枚構成にすることでズームングによる収差変動をかなり小さくすることができる。

【0043】さらに、本発明の変倍レンズは、以下の条件式(7)を満足することが望ましい。

【0044】

$$0.01 < |t2| / |t3| < 0.35 \quad (7)$$

但し、 $t2$ は第2レンズ成分の全移動量、 $t3$ は第3レンズ成分の全移動量である。

【0045】条件式(7)は第2レンズ成分と第3レンズ成分との移動量の比を規定するものである。主として変倍を行うのは第2レンズ成分であり、第3レンズ成分は補助的な変倍を行うことで、第2レンズ成分の移動量を減らしてレンズ全長の短縮化を助けている。条件式

(7)の上限を越えて第2レンズ成分の移動量が第3レンズ成分の移動量と比べて大きくなると、第3レンズ成分で変倍を助ける量がわずかとなり実質的にほとんど効果が無い。つまり、多くのレンズ成分を移動させなくてはならないデメリットだけが残る。

【0046】条件式(7)の下限を越えて第3レンズ成分の移動量が大きくなると、ミドル付近から広角端で第3レンズ成分と第4レンズ成分とが極端に接近し、第4レンズ成分に入射する光束幅が大きくなる。このため第4レンズ成分での収差補正が困難となり、明るいレンズを実現することが困難となる。

【0047】また、フォーカシングは第4レンズ成分で行うのがよい。従来のように前玉でフォーカシングを行うと前玉径が大変大きくなってしまう。これを防ぐために、最近では前玉以外でフォーカシングするインナーフォーカスやリアフォーカスが主流となってきている。本発明のレンズタイプでは第4レンズ成分でフォーカシングを行うのが最も良い。前玉以外でフォーカシングを行

う利点は前玉径が大きくなならないということのほかに、広角端ではほとんどレンズ先端までフォーカシングが可能であることが挙げられる。インナーフォーカスやリアフォーカスでは、同じ距離の物体に対するフォーカシングレンズ成分の繰り出し量が焦点距離によって異なってしまうという不便さはあるが、メリットの方がはるかに多い。

【0048】以下に本発明にかかわる変倍レンズの具体的な数値実施例を示す。ここで、各実施例において、 $r_i$  ( $i=1, 2, 3, \dots$ ) は物体側から数えて第  $i$  番目の面の曲率半径、 $d_i$  ( $i=1, 2, 3, \dots$ ) は物体側から数えて第  $i$  番目の軸上面間隔、 $n_i$  ( $i=1, 2, 3, \dots$ )、 $\nu_i$  ( $i=1, 2, 3, \dots$ ) はそれぞれ物体側から数えて第  $i$  番目のレンズの  $d$  線 ( $\lambda=587.6\text{nm}$ ) に対する屈折率及びアッペ数を示す。また、 $f$  は全系の焦点距離を示す。

【0049】実施例中、曲率半径に\*印を付した面は非球面で構成された面であることを示し、以下の非球面の面形状を表す式で定義するものとする。

曲率半径		軸上面間隔		屈折率(Nd)		アッペ数( $\nu d$ )	
$r_1$	45.676	$d_1$	1.300	$N_1$	1.83350	$\nu_1$	21.00
$r_2$	27.898	$d_2$	4.900	$N_2$	1.69680	$\nu_2$	56.47
$r_3$	-1209.614	$d_3$	0.150				
$r_4$	23.117	$d_4$	2.400	$N_3$	1.69680	$\nu_3$	56.47
$r_5$	34.926	$d_5$	24.467~8.443~1.000				
$r_6$	75.390	$d_6$	0.800	$N_4$	1.77250	$\nu_4$	49.77
$r_7$	6.939	$d_7$	3.700				
$r_8$	-28.920	$d_8$	0.700	$N_5$	1.75450	$\nu_5$	51.57
$r_9$	20.942	$d_9$	0.300				
$r_{10}$	13.634	$d_{10}$	2.200	$N_6$	1.83350	$\nu_6$	21.00
$r_{11}$	61.279	$d_{11}$	2.000~18.023~25.467				
$r_{12}$	$\infty$	$d_{12}$	2.500~3.795~4.393				
$r_{13*}$	14.918	$d_{13}$	3.200	$N_7$	1.58913	$\nu_7$	61.11
$r_{14}$	142.908	$d_{14}$	7.500~2.910~3.958				
$r_{15}$	96.674	$d_{15}$	0.900	$N_8$	1.84666	$\nu_8$	23.82
$r_{16}$	15.069	$d_{16}$	3.100	$N_9$	1.60311	$\nu_9$	60.74
$r_{17}$	-82.162	$d_{17}$	0.100				
$r_{18}$	48.748	$d_{18}$	2.800	$N_{10}$	1.58913	$\nu_{10}$	61.11
$r_{19*}$	-19.386	$d_{19}$	3.000~6.294~4.649				
$r_{20}$	$\infty$	$d_{20}$	4.840	$N_{11}$	1.51680	$\nu_{11}$	64.20
$r_{21}$	$\infty$						

[非球面係数]

$r_{13}$

$\varepsilon=1.0$

$A_4=-0.72177 \times 10^{-4}$

$A_6=-0.72868 \times 10^{-7}$

$r_{19}$

曲率半径		軸上面間隔		屈折率(Nd)		アッペ数( $\nu d$ )	
$r_1$	44.403	$d_1$	1.300	$N_1$	1.84666	$\nu_1$	23.82
$r_2$	25.645	$d_2$	5.900	$N_2$	1.67000	$\nu_2$	57.07
$r_3$	-787.042	$d_3$	0.150				

【0050】

【数1】

$$X(h) = \frac{h^2/r}{1 + \{1 - \varepsilon \cdot (h/r)^2\}^{1/2}} + \sum_{n=2}^{\infty} A_n h^n$$

【0051】

ここで、 $X$ ：光軸方向の基準面からの偏移量

$r$ ：近軸曲率半径

$h$ ：光軸と垂直な方向の高さ

$A_n$ ： $n$ 次の非球面係数

$\varepsilon$ ：2次曲面パラメータである。

【0052】尚、下記の実施例は全て4成分構成であるが、そのレンズ成分間や全系の像側あるいは物体側に、簡単な構成で比較的屈折力の弱い固定若しくは可動のレンズ成分を配置することは容易であり、本発明の主旨に含まれるものである。

【0053】＜実施例1＞

$f=65.0 \sim 10.0 \sim 5.8$

$\varepsilon=1.0$

$A_4=0.45621 \times 10^{-4}$

$A_6=0.65836 \times 10^{-6}$

$A_8=-0.11464 \times 10^{-7}$

【0054】＜実施例2＞

$f=65.0 \sim 10.0 \sim 5.8$

11						12	
r 4	21.452	d 4	2.100	N3	1.67000	ν 3	57.07
r 5	32.063	d 5	25.341~8.775~1.000				
r 6	37.766	d 6	0.800	N4	1.77250	ν 4	49.77
r 7	6.585	d 7	3.900				
r 8	-28.742	d 8	0.700	N5	1.75450	ν 5	51.57
r 9	19.849	d 9	0.300				
r 10	13.219	d 10	2.200	N6	1.83350	ν 6	21.00
r 11	60.533	d 11	2.000~18.566~26.341				
r 12	∞	d 12	2.500~3.795~4.393				
r 13*	22.823	d 13	3.200	N7	1.58913	ν 7	61.11
r 14	-53.028	d 14	7.500~2.931~3.940				
r 15	78.836	d 15	0.900	N8	1.84666	ν 8	23.82
r 16	14.964	d 16	4.000	N9	1.58913	ν 9	61.11
r 17	-27.783	d 17	1.000				
r 18	82.700	d 18	2.400	N10	1.51680	ν 10	64.20
r 19	-25.998	d 19	3.000~6.274~4.667				
r 20	∞	d 20	4.840	N11	1.51680	ν 11	64.20
r 21	∞						

[非球面係数]

r 13

 $\varepsilon = 1.0$  $A4 = -0.68914 \times 10^{-4}$  $A6 = -0.39999 \times 10^{-7}$ 

20 【0 0 5 5】&lt;実施例3&gt;

 $f = 65.0 \sim 10.0 \sim 5.8$ 

曲率半径		軸上面間隔		屈折率(Nd)		アッベ数(νd)	
r 1	37.983	d 1	1.300	N1	1.83350	ν 1	21.00
r 2	24.242	d 2	5.500	N2	1.67000	ν 2	57.07
r 3	-2615.405	d 3	0.150				
r 4	23.712	d 4	2.200	N3	1.60311	ν 3	60.74
r 5	42.796	d 5	22.250~7.696~1.000				
r 6	106.934	d 6	0.800	N4	1.71300	ν 4	53.93
r 7	6.755	d 7	3.700				
r 8	-24.054	d 8	0.700	N5	1.67000	ν 5	57.07
r 9	14.255	d 9	0.300				
r 10	11.986	d 10	2.200	N6	1.83350	ν 6	21.00
r 11	46.901	d 11	2.000~16.554~23.250				
r 12	∞	d 12	2.500~3.795~4.393				
r 13*	14.744	d 13	3.200	N7	1.64000	ν 7	58.61
r 14	280.502	d 14	1.000				
r 15	-20.215	d 15	0.900	N8	1.80518	ν 8	25.43
r 16	-29.341	d 16	7.500~2.290~3.266				
r 17	41.796	d 17	0.900	N9	1.84666	ν 9	23.82
r 18	14.176	d 18	3.100	N10	1.69680	ν 10	56.47
r 19	-242.844	d 19	0.100				
r 20	86.229	d 20	2.800	N11	1.58913	ν 11	61.11
r 21*	-18.417	d 21	3.000~6.915~5.341				
r 22	∞	d 22	4.840	N12	1.51680	ν 12	64.20
r 23	∞						

[非球面係数]

r 13

 $\varepsilon = 1.0$  $A4 = -0.49003 \times 10^{-4}$  $A6 = 0.21064 \times 10^{-6}$ 

r 21

 $\varepsilon = 1.0$ 50  $A4 = 0.79885 \times 10^{-4}$

13

$$A6 = 0.11328 \times 10^{-5}$$

$$A8 = -0.15926 \times 10^{-7}$$

曲率半径		軸上面間隔		屈折率(Nd)		アッベ数( $\nu_d$ )	
r1	37.983	d1	1.300	N1	1.83350	$\nu_1$	21.00
r2	24.242	d2	5.500	N2	1.67000	$\nu_2$	57.07
r3	-2957.967	d3	0.150				
r4	23.706	d4	2.200	N3	1.60311	$\nu_3$	60.74
r5	42.873	d5	22.222~7.693~1.000				
r6	107.044	d6	0.800	N4	1.71300	$\nu_4$	53.93
r7	6.755	d7	3.700				
r8	-24.073	d8	0.700	N5	1.67000	$\nu_5$	57.07
r9	14.257	d9	0.300				
r10	11.990	d10	2.200	N6	1.83350	$\nu_6$	21.00
r11	46.912	d11	2.000~16.529~23.222				
r12	$\infty$	d12	2.500~3.795~4.393				
r13*	14.676	d13	3.200	N7	1.62041	$\nu_7$	60.29
r14	353.499	d14	1.000				
r15	28.077	d15	0.900	N8	1.83350	$\nu_8$	21.00
r16	20.619	d16	7.500~2.308~3.290				
r17	40.575	d17	0.900	N9	1.84666	$\nu_9$	23.82
r18	14.186	d18	3.100	N10	1.69680	$\nu_{10}$	56.47
r19	-236.624	d19	0.100				
r20	86.147	d20	2.800	N11	1.58913	$\nu_{11}$	61.11
r21*	-18.476	d21	3.000~6.897~5.317				
r22	$\infty$	d22	4.840	N12	1.51680	$\nu_{12}$	64.20
r23	$\infty$						

[非球面係数]

r13

$$\varepsilon = 1.0$$

$$A4 = -0.70889 \times 10^{-4}$$

$$A6 = -0.50264 \times 10^{-7}$$

r21

$$\varepsilon = 1.0$$

$$A4 = 0.62913 \times 10^{-4}$$

$$A6 = 0.88209 \times 10^{-6}$$

$$30 \quad A8 = -0.15916 \times 10^{-7}$$

【0057】&lt;実施例5&gt;

$$f = 37.9 \sim 18.0 \sim 6.7$$

曲率半径		軸上面間隔		屈折率(Nd)		アッベ数( $\nu_d$ )	
r1	20.340	d1	1.100	N1	1.83350	$\nu_1$	21.00
r2	15.420	d2	1.200				
r3	17.018	d3	4.650	N2	1.69680	$\nu_2$	56.47
r4	500.706	d4	19.417~12.776~1.150				
r5	-40.819	d5	0.600	N3	1.75450	$\nu_3$	51.57
r6	7.006	d6	2.400				
r7*	19.466	d7	2.300	N4	1.84506	$\nu_4$	23.66
r8	39.586	d8	1.650~8.291~19.917				
r9	$\infty$	d9	6.100~6.682~7.700				
r10*	13.674	d10	2.700	N5	1.76683		
r11	32.597	d11	4.500~1.803~2.349				
r12	44.528	d12	1.300	N6	1.80518	$\nu_5$	25.43
r13	8.405	d13	3.600	N7	1.76683		
r14*	-22.463	d14	2.211~4.327~2.762				
r15	$\infty$	d15	4.840	N8	1.51680	$\nu_6$	64.20
r16	$\infty$						

[非球面係数]

50 r7

14

$\varepsilon = 1.0$  $A4 = 0.20592 \times 10^{-3}$  $A6 = -0.48934 \times 10^{-6}$  $A8 = 0.21295 \times 10^{-6}$  $A10 = -0.44687 \times 10^{-8}$  $r10$  $\varepsilon = 1.0$  $A4 = -0.44636 \times 10^{-4}$  $A6 = -0.80443 \times 10^{-6}$  $A8 = 0.40863 \times 10^{-7}$ 

曲率半径

r1	30.682
r2	20.799
r3	343.739
r4	20.902
r5	46.220
r6	44.854
r7	5.850
r8	-23.754
r9	33.701
r10	10.582
r11	20.456
r12	$\infty$
r13	16.429
r14*	52.853
r15	29.905
r16	12.665
r17	10.646
r18*	-14.972
r19	$\infty$
r20	$\infty$

[非球面係数]

 $r14$  $\varepsilon = 0.66708 \times 10$  $A4 = -0.14598 \times 10^{-3}$  $A6 = 0.22461 \times 10^{-5}$  $A8 = 0.34191 \times 10^{-7}$  $A10 = -0.47697 \times 10^{-9}$  $r18$ 

曲率半径

r1	35.679
r2	23.809
r3	-291.279
r4	22.567
r5	49.220
r6	97.975
r7	5.961
r8	-26.786
r9	32.854
r10	11.024

軸上面間隔

d1	1.100
d2	4.200
d3	0.100
d4	2.700
d5	19.776~16.288~1.100
d6	1.100
d7	3.000
d8	0.700
d9	0.100
d10	1.700
d11	2.000~5.488~20.676
d12	1.700~2.746~7.303
d13	3.000
d14	13.000~4.503~0.782
d15	0.750
d16	0.400
d17	4.600
d18	1.500~8.950~8.116
d19	4.840

 $A10 = -0.72788 \times 10^{-9}$  $r14$  $\varepsilon = 1.0$  $A4 = 0.11166 \times 10^{-3}$  $A6 = -0.45960 \times 10^{-5}$  $A8 = 0.25463 \times 10^{-6}$  $A10 = -0.51255 \times 10^{-8}$ 

【0058】&lt;実施例6&gt;

 $f = 70.0 \sim 36.0 \sim 6.2$ 

10

屈折率(Nd)

N1	1.83350
N2	1.58913
N3	1.58913
N4	1.69680
N5	1.69680
N6	1.83350
N7	1.58913
N8	1.83350
N9	1.58913
N10	1.51680

アッペ数( $\nu_d$ )

$\nu_1$	21.00
$\nu_2$	61.11
$\nu_3$	61.11
$\nu_4$	56.47
$\nu_5$	56.47
$\nu_6$	21.00
$\nu_7$	61.11
$\nu_8$	21.00
$\nu_9$	61.11
$\nu_{10}$	64.20

 $\varepsilon = -0.30872$  $A4 = 0.47860 \times 10^{-4}$  $A6 = 0.14001 \times 10^{-5}$  $A8 = 0.56602 \times 10^{-7}$  $A10 = -0.13320 \times 10^{-8}$ 

【0059】&lt;実施例7&gt;

 $f = 70.0 \sim 36.0 \sim 6.2$ 

屈折率(Nd)

N1	1.83350
N2	1.58913
N3	1.58913
N4	1.69680
N5	1.69680
N6	1.83350

アッペ数( $\nu_d$ )

$\nu_1$	21.00
$\nu_2$	61.11
$\nu_3$	61.11
$\nu_4$	56.47
$\nu_5$	56.47
$\nu_6$	21.00

17

18

r11	21.368	d11	2.000~5.788~21.293				
r12	$\infty$	d12	1.700~2.647~6.523				
r13	14.036	d13	2.400	N7	1.58913	$\nu 7$	61.11
r14	-47.783	d14	0.800				
r15	-30.522	d15	0.600	N8	1.80518	$\nu 8$	25.43
r16*	237.731	d16	13.000~4.385~2.450				
r17	23.104	d17	0.750	N9	1.83350	$\nu 9$	21.00
r18	17.108	d18	0.400				
r19	12.830	d19	4.600	N10	1.58913	$\nu 10$	61.11
r20*	-27.086	d20	1.500~9.168~7.227				
r21	$\infty$	d21	4.840	N11	1.51680	$\nu 11$	64.20
r22	$\infty$						

[非球面係数]

r16

 $\varepsilon = 1.0$ 

r20

 $\varepsilon = -0.91873 \times 10^{-1}$  $A4 = 0.11455 \times 10^{-3}$  $A6 = 0.11126 \times 10^{-5}$  $A8 = 0.12889 \times 10^{-7}$  $A10 = -0.67695 \times 10^{-9}$ 

【0060】&lt;実施例8&gt;

 $f = 66.0 \sim 35.0 \sim 5.7$ 

曲率半径	軸上面間隔	屈折率(Nd)	アッベ数( $\nu d$ )
r1 41.873	d1 1.100	N1 1.84666	$\nu 1$ 23.82
r2 23.085	d2 5.700	N2 1.51680	$\nu 2$ 64.20
r3 -86.708	d3 0.100		
r4 19.106	d4 2.700	N3 1.51680	$\nu 3$ 64.20
r5 78.181	d5 18.458~14.850~0.570		
r6 -217.994	d6 0.650	N4 1.77250	$\nu 4$ 49.77
r7 8.760	d7 3.300		
r8 -10.233	d8 0.550	N5 1.75450	$\nu 5$ 51.57
r9 8.008	d9 1.900	N6 1.84666	$\nu 6$ 23.82
r10 -392.682	d10 2.000~5.608~19.888		
r11 $\infty$	d11 1.500~1.861~3.289		
r12 13.840	d12 2.800	N7 1.59844	
r13* -346.342	d13 9.453~3.853~10.186		
r14 18.017	d14 0.650	N8 1.84666	$\nu 7$ 23.82
r15 8.630	d15 3.800	N9 1.59844	
r16* -26.722	d16 4.000~9.239~1.478		
r17 $\infty$	d17 4.840	N10 1.51680	$\nu 8$ 64.20
r18 $\infty$			

[非球面係数]

r13

 $\varepsilon = 1.0$  $A4 = 0.82831 \times 10^{-4}$  $A6 = -0.49893 \times 10^{-7}$  $A8 = 0.11039 \times 10^{-8}$ 

r16

 $\varepsilon = 1.0$  $A4 = 0.54030 \times 10^{-4}$ 40  $A6 = 0.16398 \times 10^{-6}$  $A8 = -0.31394 \times 10^{-8}$ 

【0061】&lt;実施例9&gt;

 $f = 66.0 \sim 15.0 \sim 5.7$ 

曲率半径	軸上面間隔	屈折率(Nd)	アッベ数( $\nu d$ )
r1 36.192	d1 1.100	N1 1.84666	$\nu 1$ 23.82
r2 22.258	d2 6.000	N2 1.51680	$\nu 2$ 64.20
r3 -80.549	d3 0.100		
r4 19.560	d4 2.500	N3 1.51680	$\nu 3$ 64.20
r5 47.684	d5 18.800~9.673~0.572		

19						20
r 6	24.332	d 6	0.700	N 4	1.77250	ν 4 49.77
r 7	8.591	d 7	3.200			
r 8	-11.153	d 8	0.600	N 5	1.75450	ν 5 51.57
r 9	7.775	d 9	2.000	N 6	1.84666	ν 6 23.82
r 10	40.449	d 10	1.700~10.827~19.928			
r 11	∞	d 11	2.000~2.913~3.823			
r 12	11.558	d 12	3.300	N 7	1.58913	ν 7 61.11
r 13	-20.417	d 13	1.200			
r 14	-11.008	d 14	0.800	N 8	1.58913	ν 8 61.11
r 15*	-68.185	d 15	8.500~1.919~3.919			
r 16	18.723	d 16	0.650	N 9	1.83350	ν 9 21.00
r 17	9.750	d 17	0.500			
r 18	10.996	d 18	3.800	N 10	1.58913	ν 10 61.11
r 19*	-13.722	d 19	1.000~6.669~3.759			
r 20	∞	d 20	4.840	N 11	1.51680	ν 11 64.20
r 21	∞					

[非球面係数]

r 15

 $\varepsilon = 0.26051$  $A 4 = -0.10940 \times 10^{-4}$  $A 6 = 0.32705 \times 10^{-5}$  $A 8 = -0.19181 \times 10^{-6}$  $A 10 = 0.19709 \times 10^{-8}$ 

r 19

 $\varepsilon = -0.35363 \times 10$  $A 4 = -0.37759 \times 10^{-4}$  $A 6 = -0.19674 \times 10^{-5}$ 20  $A 8 = 0.11961 \times 10^{-6}$  $A 10 = -0.12711 \times 10^{-8}$ 

【0062】尚、各実施例における各条件式の値は以下のとおりである。

条件式	(1)	(2)	(3)	(7)
実施例 1	0.144	0.690	0.273	0.081
実施例 2	0.139	0.664	0.209	0.078
実施例 3	0.156	0.746	0.209	0.089
実施例 4	0.156	0.746	0.209	0.089
実施例 5	0.184	0.669	0.276	0.088
実施例 6	0.182	0.733	0.248	0.300
実施例 7	0.182	0.757	0.240	0.250
実施例 8	0.184	0.970	0.189	0.100
実施例 9	0.174	0.861	0.203	0.100。

【0063】

【発明の効果】以上説明したように、本発明によれば、変倍比が1.2倍程度でFナンバーが1.8程度という高変倍でかつ明るい変倍レンズを、コンパクトかつ少ない構成枚数で実現し、しかも性能面でも充分満足できるものを提供することができる。

【図面の簡単な説明】

【図1】本発明の実施例1に対応するレンズの構成図である。

【図2】本発明の実施例2に対応するレンズの構成図である。

【図3】本発明の実施例3に対応するレンズの構成図である。

【図4】本発明の実施例4に対応するレンズの構成図である。

【図5】本発明の実施例5に対応するレンズの構成図である。

【図6】本発明の実施例6に対応するレンズの構成図である。

【図7】本発明の実施例7に対応するレンズの構成図である。

【図8】本発明の実施例8に対応するレンズの構成図である。

【図9】本発明の実施例9に対応するレンズの構成図である。

【図10】本発明の実施例1に対応するレンズの収差図である。

【図11】本発明の実施例2に対応するレンズの収差図である。

50 【図12】本発明の実施例3に対応するレンズの収差図

である。

【図13】本発明の実施例4に対応するレンズの収差図である。

【図14】本発明の実施例5に対応するレンズの収差図である。

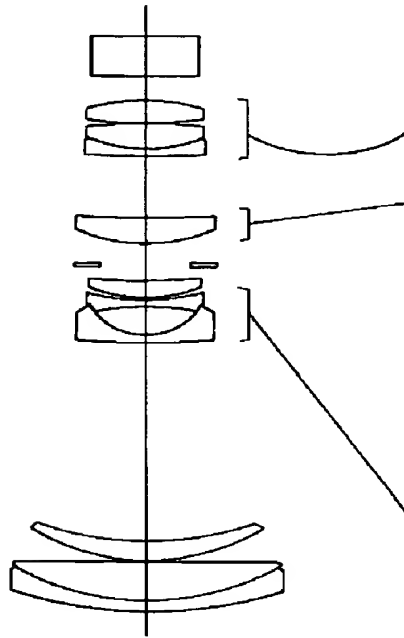
【図15】本発明の実施例6に対応するレンズの収差図である。

【図16】本発明の実施例7に対応するレンズの収差図である。

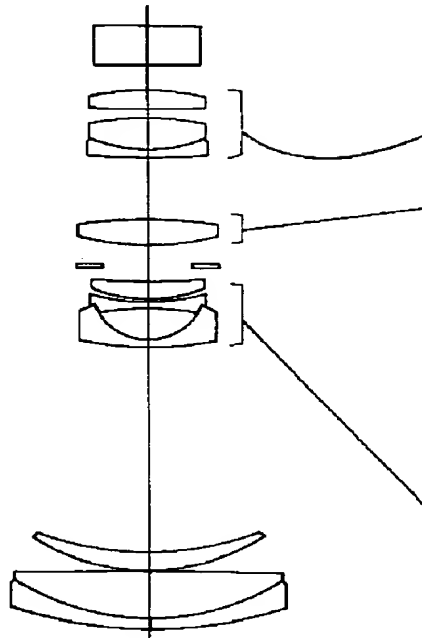
【図17】本発明の実施例8に対応するレンズの収差図である。

【図18】本発明の実施例9に対応するレンズの収差図である。

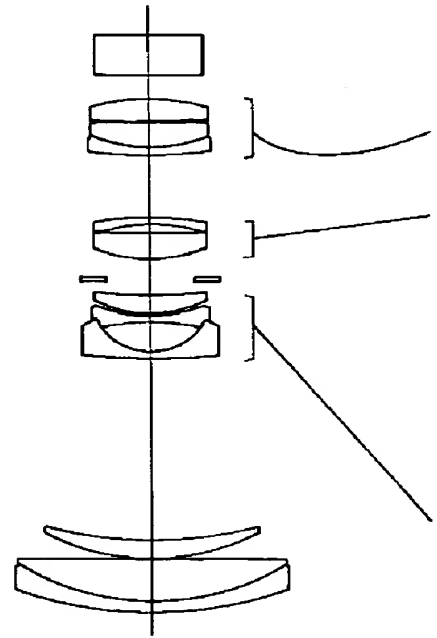
【図1】



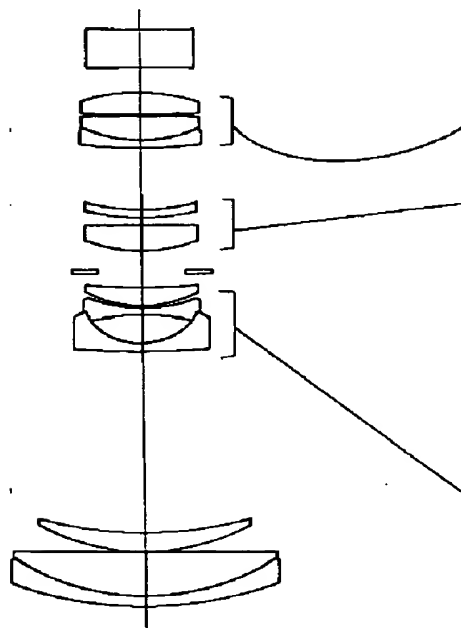
【図2】



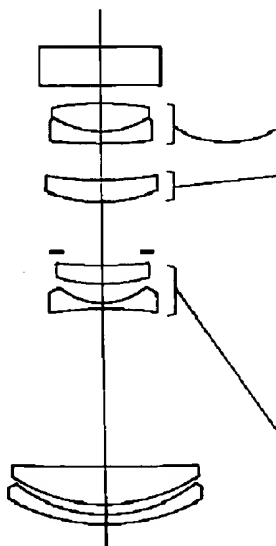
【図3】



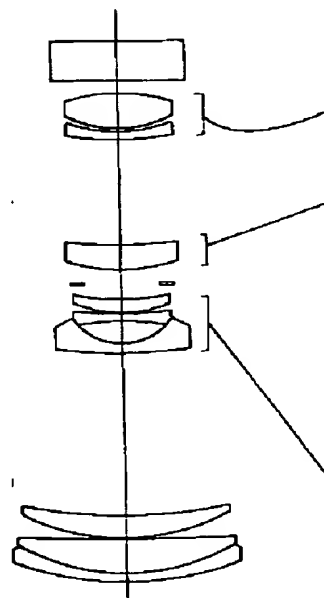
【図4】



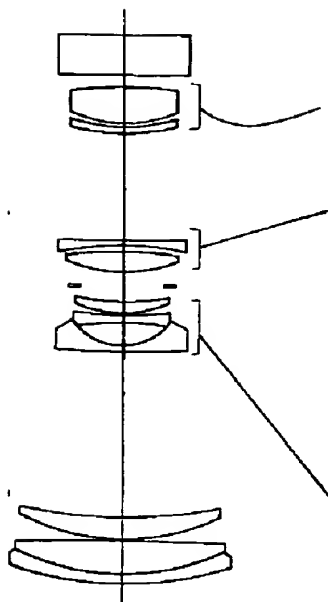
【図5】



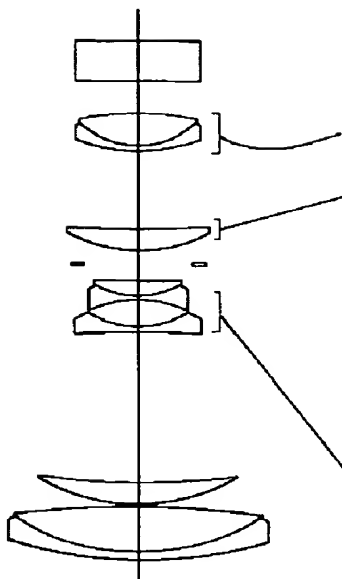
【図6】



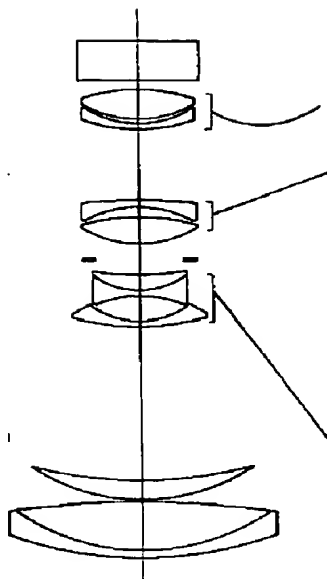
【圖7】



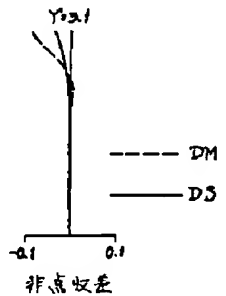
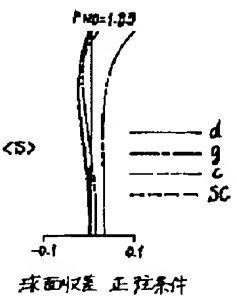
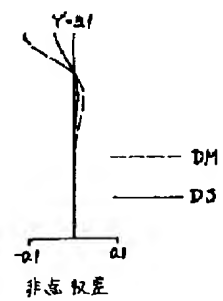
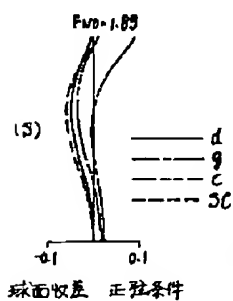
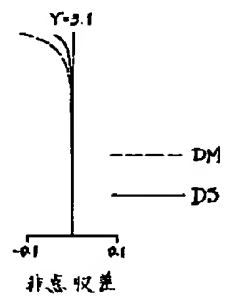
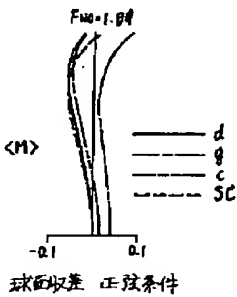
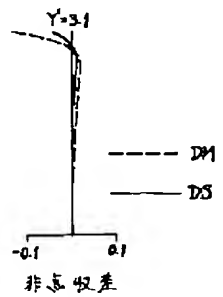
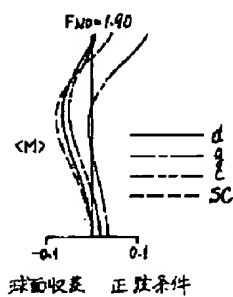
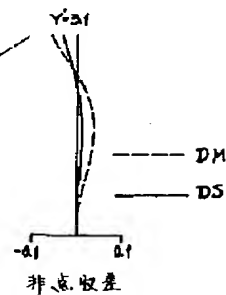
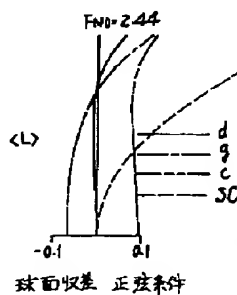
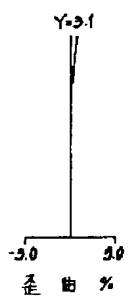
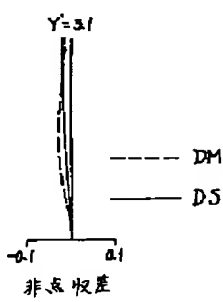
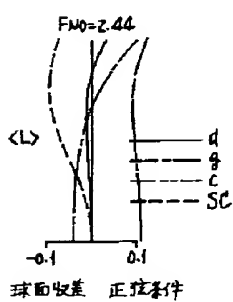
【圖8】



【圖9】

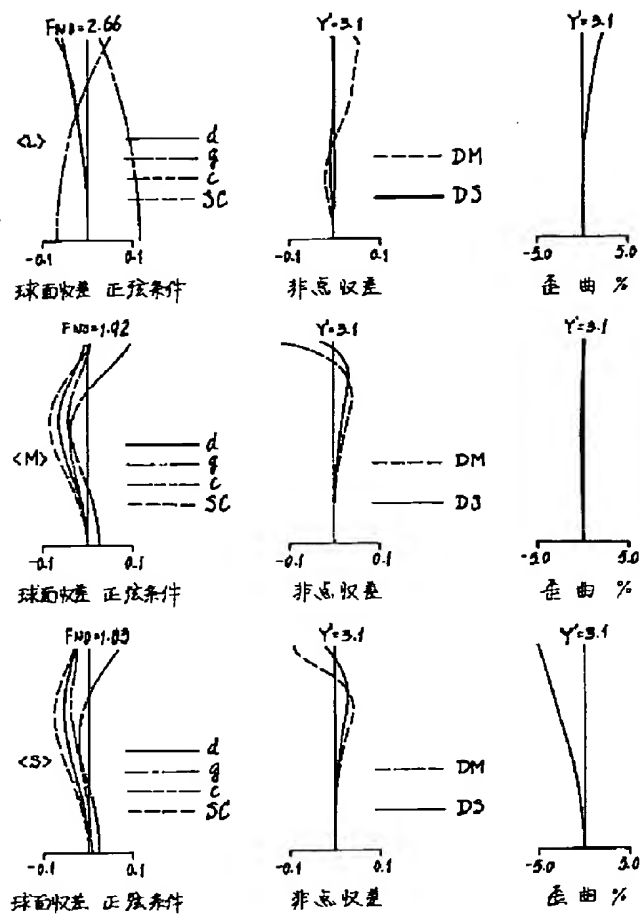


【圖10】

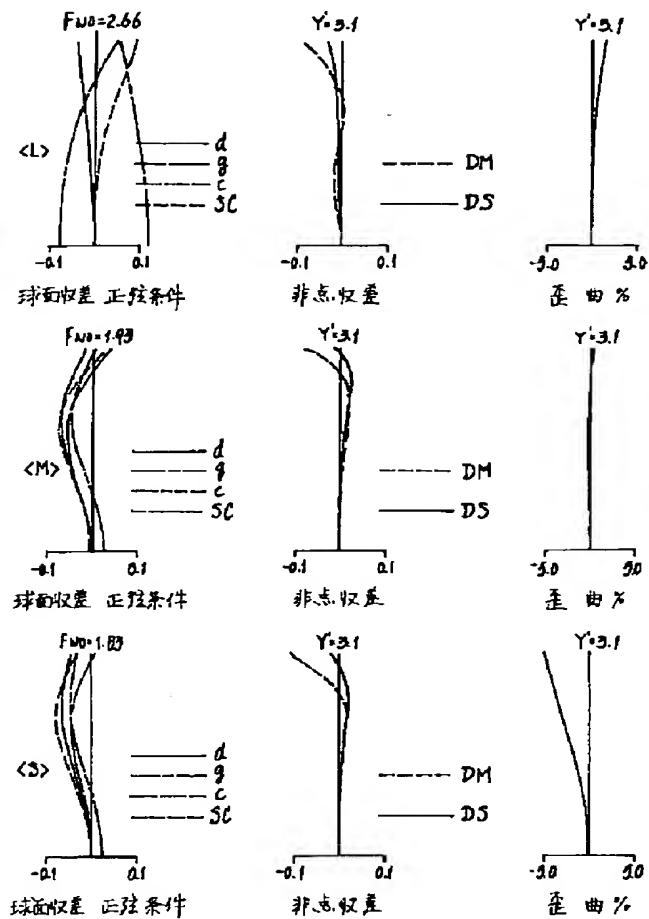


【圖11】

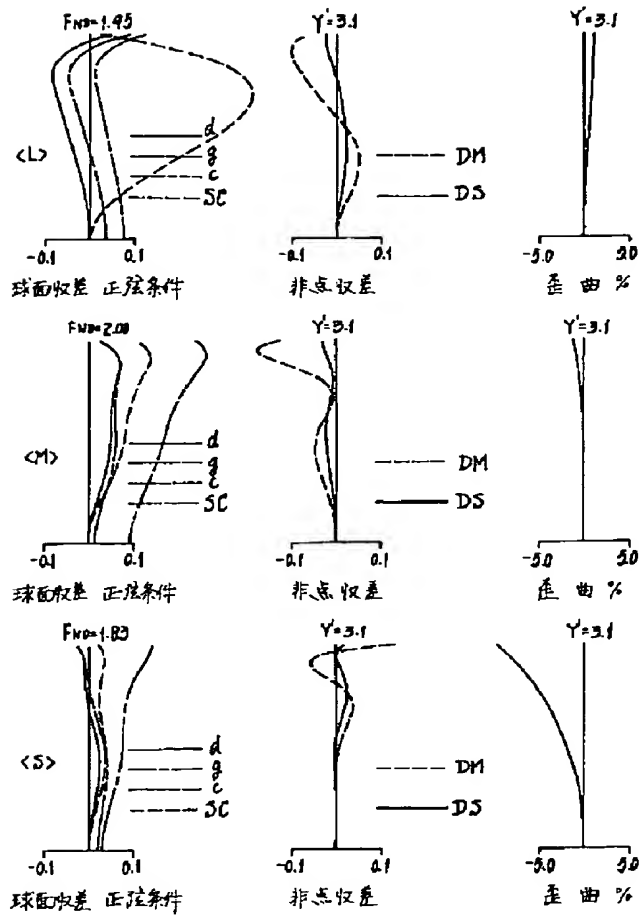
【圖12】



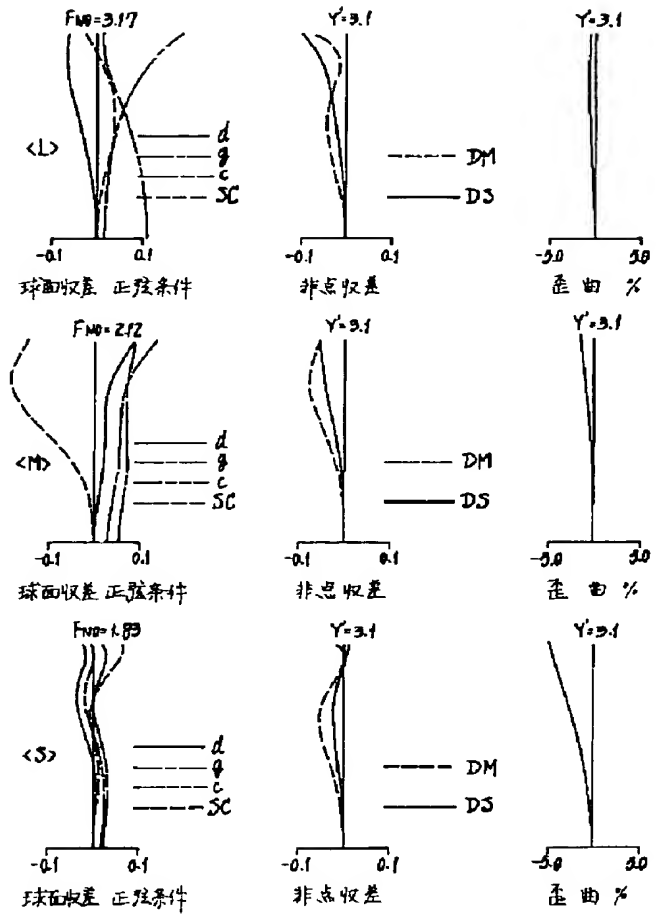
【圖13】



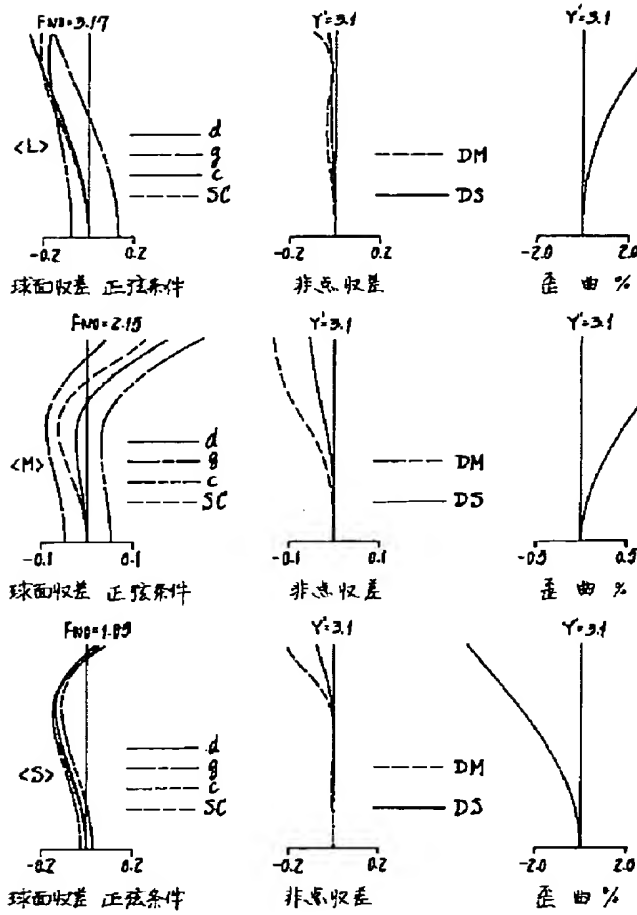
【圖14】



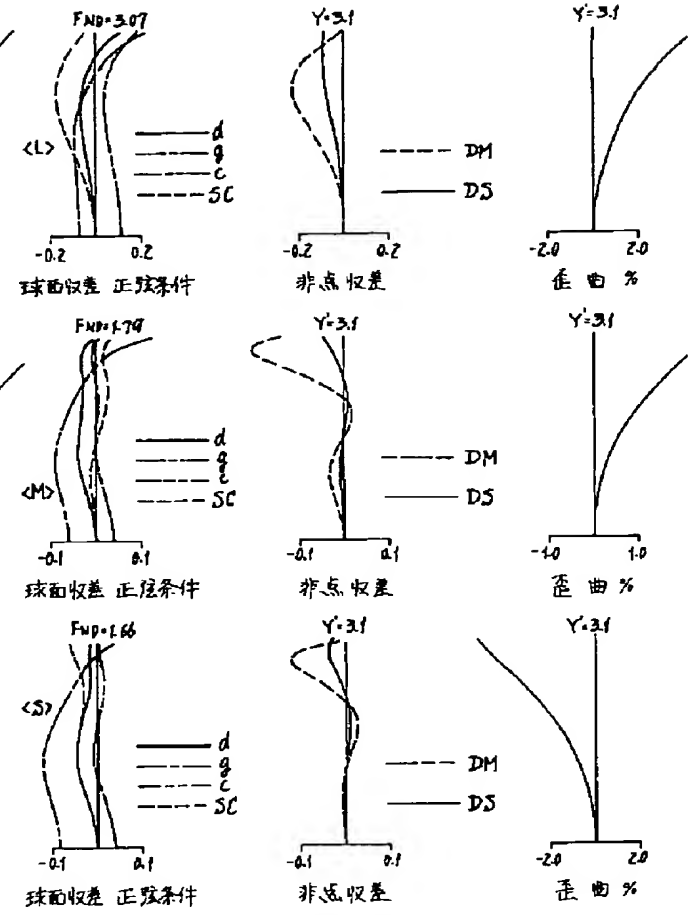
【圖15】



【圖16】



【圖18】



【圖17】

